錠前サオリ

鍵穴は水着の下に

サオリちゃん、まだ先生の奴隷になれてなかったの？

「アリウススクワッド総出演！」

R-18
成年向け

ブルーアーカイブ
水着ハーレム小説の決定版

著：a-su

ここは快楽のリゾート。
水着の下でサオリの鍵穴が開く――

「サオリが先生に堕ちていく過程が最高にエロくてたまりません！ 特にアツコが奴隷、ミサキがメス犬、ヒヨリがオナホって自称しちゃうのに引きずられていくところが、アリウス好きとしては最高のご褒美」
「テキスト量が多くて読むのに疲れた。同人誌にして、エロシーンをもっとイラストで補完してほしい。そしたら視覚派としてはもっと楽しめたと思う」
「サオリとアツコたちの絆が感じられるシーンが意外と良かった。女の子同士で支え合って先生に奉仕する姿に、ちょっとした百合っぽいニュアンスを感じてドキッとした」
「先生がハーレム王すぎて萎えた」
「未成年だから、親のパソコンで読みました…。エロすぎて親に見つかったら終わり」
「ハーレム展開が刺激的すぎてヤバい！ ブルアカの世界ってこんなエロいんだって、初めて知りました」

以上は Web 投稿時に寄せられた感想のことばの数々です。このたび「ブルーマーケット17」への参加に際し、Web 版に全面改稿を行い、文庫本の形にいたしました。

大学生も、社会人も、サオリやアリウススクワッドに思い入れのある『ブルーアーカイブ』ファンも、ハーレムや調教ものが好きな成人向け同人誌愛好者も、水着とリゾートシチュエーションに惹かれる方も、凛々しいサオリの葛藤と快楽堕ちに心を掴まれたい『ブルアカ』ファンも……ぜひ、お手元にこの一冊を置いてみてください。

サオリからの御挨拶

先生、お前はあの夜を覚えているか？　そう、アウトロービーチでのフェスの後、私が本当の意味でお前の女になった夜……お前だけの『売春婦』になった夜だ。

あのスイートルームで、アツコが「私は先生の奴隷♡」と媚びながら水着を脱ぎ、ヒヨリがデカ乳でオチンポをしごきたて、ミサキが首輪をつけてメス犬みたいに腰をヘコつかせた。アテられた私も水着を脱いで、アヘ顔でみんなと競い合い……なあ、お前が私たちの子宮に次々と吐き出したザーメンは、いったい何回分だったかな？

私もウブだったから、最初は恐怖で凍りついたよ。ハーレム・セックスの光景が、自由を奪う鎖に見えた。それでも今こうして、お前の呼び出しに二十四時間いつでも対応するような生き方をしているのは……ふ、どうしてだったかな。

さあ先生、私を買ってくれ。いつも通り五百円でいい。千円コースは、私でも腰にクルからな。ああ、もちろん手抜きはしないさ。私はお前に抱かれるのが生きがいの専属売春婦、錠前サオリだ。お前のチンポにまたがって尻を振り、精液を吐き出させたい。唇で胸で、専用まんこで、愛しいお前を悦ばてあげたいんだ。よろしく頼む。

リビングルーム 4
プライベートプール 22
ベッドルーム 46
バスルーム 72
バルコニー 94

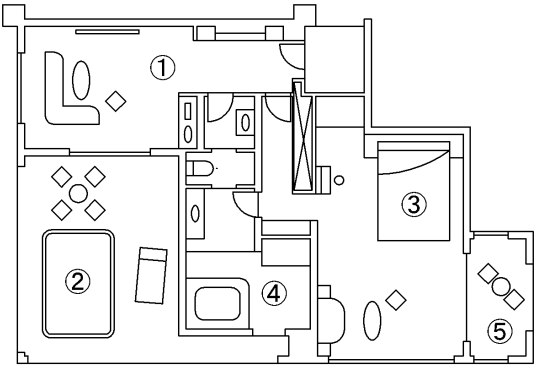
① リビングルーム

（設備）

- 大型ソファセット（5名～7名様用ゆったり仕様）
- 壁掛け式ディスプレイ(65 インチ)
- サイドテーブル ＆ コーヒーテーブル
- ミニバー（冷蔵庫、グラス、簡単なお酒やドリンク類）
- オーシャンビューの大きな窓

（ホテルからのご提案）

ビーチで遊び疲れた後は、大きなモニタで生徒様方の水着姿を再生し、艶姿の品評会などいかがでしょう。ソファは防水仕様で、ベッド代わりにもなります。貴紳を囲ませ、ムーディーな間接照明の下で汗まみれの肌を捧げさせてみませんか。



リビングルーム

錠前(じょうまえ)サオリは囚われていた。

拘束されてはいない。心を縛り付けられているのだ。アウトロービーチを見下ろす高級ホテルのスイートルームで、リビングの床に尻餅をついて震えている。

（夢だ。これは悪い夢だ。まさかこんな、こんなムゴいことを、イヤらしいことを、先生がするわけがない。目が覚めれば、きっと私はまだ夏祭りの最中で――……）

サオリは今まさに、『最も恐れていた光景』を見せつけられている。

長いソファの中央辺りに三人の少女が膝を立て、背もたれに身を乗り出していた。思い思いの水着を身につけた――しかし、そのボトムを膝まで下ろした彼女たちは、丸出しのお尻をクイッと突き出している。

真ん中にいる一人を、線の細い優男がペニスで犯した。

「あー……ミサキのおまんこ、私にすごく甘えて……気持ちいいよ、ありがとう」

「せ、先生……私も、すご、イイよぉ……♡」

女性器にペニスが埋めこまれていく。セパレートの黒い水着を着た戒野(いましの)ミサキの身体に対し、大きすぎないかと思うほどの陰茎がすっぽり収まった。

「先生っ、早く突いてぇ♡　サオリが見てる前でっ、早くぅ♡」

「ミサキがイったらアツコにも下さい♡」
「えへへ、ヒヨリも、我慢できないですうっ♡」
「ミサキを、先生のメス犬を、めちゃくちゃに――……あ、きたぁっ♡」
先生の腰とミサキのヒップが乾いた音を立てる。
「あ、あ、あ♡　あっ♡」
小刻みで軽い音が三回、ゆっくりした重い音が一回。三回、一回、リズムを刻む。
「ああっ、ああっ、ああっ♡　くああっ♡」
ミサキの声が高まる。先生がリズムを刻むほどに高まる。どっしりとしたソファの軋(きし)みが徐々に、徐々に大きくなっていく。
「アツコっ、ヒヨリっ、今日の先生、なんかスゴい、なんか凄いよぉ、今までで一番すっごいかもぉ♡　これ、もうイっちゃうっ、先生っ、セックス強すぎっ、素敵っ、カッコいいよ、先生っ♡」
感情を表に出さないタイプだったミサキが、あけすけな言葉で男のたくましさを褒めそやす。身体を反らして、沈めて、また反らして……ぴたっと止まるたびに全身を震わせる。男への賞賛、嬌声と動作で、感動の大きさを伝えようとしているのか。
誰に？

それは両脇で膝立ちになっている秤(はかり)アツコと槌永(つちなが)ヒヨリに対してでもあろうし……乱れるミサキと乱れさせる先生を前に、呆然としているサオリに対しても、であろう。

「ミサキ……こんな、こんな、ウソだ……」

サオリは黒のチューブトップにホットパンツという格好で床に尻餅をついていた。ミサキが犯される様を見せられ、力なくうめく以外は何もできずにいる。

先生がひときわ大きく腰をスイングした。ミサキの声が一気に切羽詰まる。

「ぁ、あいくッ、あぁイくッ、いいですかっ、イッてもいいですかッ!?」

「いいぞイけっ、ミサキッ、ほらイけっ」

ぱん、ぱん、ぱん、ぱんっ！

「ありがとうございます、イッ、イかせていただきます、ありがとうございますッ、メス犬、ミサキッ、イかせていただきますッ、ありがッ、イ、イかせ、て……ッ！」

ミサキは宙を振り仰ぎ、舌をピンと突き出し、全身をガクガク震え上がらせた。

絶頂したのだ。シャーレの先生に後ろから犯されて。まだ十六歳のミサキが深く、激しく、スレンダーな肢体をピンク色に染めながら……。

「ッッ――……、あッ――……、ああッ――……♡　ぅぅッ――……♡」

やがて震えていた体が弛緩し、伸びた舌が垂れ、喘ぎ声がかすれていく。

「あは、イッてるミサキの顔かわいい。夢を見てるみたいで、すごくエッチ……♡」
「はい、犯してもらえて幸せそう……先生、こっちのお尻にも入れてくださぁい♡」
アツコとヒヨリが口々にミサキの絶頂を褒め称え、尻を振って先生に媚びる。
これこそ、かつてサオリが最も恐れた光景。大切な幼なじみたちが、悪い大人から性的に搾取される光景――――しかし。
「ミサキ、ちゃんとイケたかい？」
先生からお尻をぺしぺし叩かれて、ミサキはのろのろと振り向いた。
「う、ん……イッた……その……」
「なんだい？　お尻を撫でて欲しいのかな」
「ぁン、違う……また犯して。してもらえるまで生きていたいって思わせて……♡」
「もちろんだよ、何度でもしてあげる。メス犬のミサキをずっと飼ってあげるよ」
ミサキはゆるんだ顔で微笑む。目にも口にも力が入っていない。心を許し、任せ、全てを委ねきったような脱力。なんの屈託も、恐れも、拒絶もない。
「ねえ、やっぱりお尻撫でて……ぁうン……♡　先生、飼い主さま、大好き……♡」
「どういたしまして。次は誰かな？」
ずるり。

「やあんっ……すごい♡」
「たくましいですぅ～……♡」
アツコとヒヨリの黄色い声につられ、サオリも瞳にソレを映した。
ミサキの中から抜かれ、宙へ頭を跳ね上げた先生のペニス。赤黒く、たくましく、まとったミサキの体液でシャンデリアの光を反射している。
途端、サオリの身体がざわめいた。かつて、彼にバージンを捧げた日の寒さと熱さとが、身体の芯から蘇ってくる。敵対した機械人（アンドロイド）に陵辱されかけたところを救われ、せめて初めてだけは信じられる相手に、と泣いてすがって抱いてもらった夜の記憶。
「先生、お前……私だけでなく、みんなを……」
どうして自分は、こんな異常事態に陥ったのだろうか。

――アリウス分校の残党から追われる身となり、アツコたちと別れて裏社会で生きるようになった。ある日ヘルメット団の依頼でアウトロービーチの夏祭りに参加し、設営に護衛、ＤＪと、かつては知るよしも無かったことを体験した。
そこで、アツコ・ヒヨリ・ミサキと再会したのだ。思い思いの水着を着た三人は明るく朗らかで、アリウス時代とは別人のようだった。……今思えば、どこか熱っぽい

目で先生を見ていたか。

そして夏祭りが終わった後、アツコに誘われたのだ。先生と泊まっているホテルに来ないか、と。金も無いからありがたかったし、もっとみんなと話がしたかったから、このリビングで夕食を共にして――

（先生の部屋がスイートルームだった時点で、おかしいと思うべきだった）

彼はそんな金の使い方をする男ではなかった。アツコたちは平然とルームサービスを頼むような女の子ではなかった。かつての彼らとは違うと警戒すべきだったのに。

（逃げるべきだ）

これは罠だ。彼らがサオリをここに呼んだのは恐らく犯すためだ。銃を使ってでも逃げなければ。

（逃げていいはずがない）

大切な幼なじみたちを搾取されるままにしておいてはいけない。助けなければ。

（そもそも、逃げられない）

全身が震えあがっている。先生のモノを前にして怯え、すくみ上がっているのだ。

視線の先でヒヨリが床に降り、先生とミサキの結合部に舌を伸ばした。

「えへへ、ミサキさんのエッチな涎でベタベタです……へろぉ……♡」
「ヒヨリ……お前もなのか……」
オレンジと白の花柄ビキニを身につけたヒヨリが、汁の垂れるタマ袋を舐めてすくう。舌の腹をこすりつけながら、先端までねっちりと舐め上げた。
そして自然な動作で、亀頭へ唇をかぶせる。
「んふぅん……んぐっ――……♡」
「あー、ヒヨリってばまたそんなトロ顔して」
「ぇへぇ……らって私、先生（ふぇんふぇぇ）の、オナホれすからぁ……♡」
アツコの羨ましそうな声にも、ヒヨリはどこ吹く風だ。昇った頭をゆっくり落とし、夢見るようにまぶたを落としながら、仲間を蹂躙したペニスを咥え込んでいく。
くぽ♡と深く、くぽ♡と浅く、ペニスを口内に出入りさせる。絞った唇でくぽくぽシゴく。竿の根元からカリ首まで、焦れったいようなペースで何度も往復した。
フェラチオのリズムに合わせて、四人の中で一番大きい乳房がたぷたぷ揺れる。
「んっ、んーっ、んぅう……んふ――……♡　ちゅぱっ」
ヒヨリが口を離すと、唇とペニスの間に糸が引いた。
唾液を塗り重ねられた男の器官はますます雄々しく、サオリの眼を釘付けにする。

「ねぇ、飼い主さまぁぁっ……♡」
背筋をヒクンヒクンさせていたミサキが先生を見返り、ねだるような眼差しで見上げる。吐息が冷房の中で湯気を立てそうだ。
今日のミサキは、かつて首を吊った時の痕を黒い首輪で隠している。
「牝犬ミサキの発情オマンコ、もう一度お使い下さい……お願いぃ、ねぇンいいでしょ、ねぇ、ミサキの飼い主さまぁぁ……♡」
ミサキは再びくいと腰を突き上げ、左右にフリフリ振りたくる。一番恥ずかしいところを先生にアピールし、サオリにも見せつける。
黒い水着のボトムは右の足首まで落ち、ヒップは丸出し。シャンデリアの下で、充血した肉唇の盛り上がり具合にピンク色、スリットの陰りがはっきり分かった。
「いいとも。可愛いミサキのためだもの」
「あっ、きたっ――……んあああっ」
ミサキは歓喜の声を上げた。小振りながらも形のいい尻肉を先生の腰が歪めると、肩まである黒髪をバサバサと揺らしながら喜びの悲鳴をあげる。
「飼い主様ッ、飼い主さまっ♡　あぁ、チンポすごく興奮してるぅ、サオリが見てるせいなのっ？　ガチガチすぎて、メス犬まんこ、んあああぁッ!?」

「ホントですね、ミサキさんのオマンコめいっぱい広がってます。充血してお豆さんまでぷっくり……あは、指でちょっと触っただけで、ビクって……♡」
「んっ、ぁっ♡　や、やめッ――ひぁあッ♡　ヒヨリっ、今はダメっ……！　さ、触るな……おまんこ触らないでぇぇぇぇ……！」
　先生の股下に潜りこんだヒヨリが結合部を撫で回している。自分の脚をM字に開き、片方の手でビキニをずらして陰部を慰めていた。
「ヒヨリもぉ、ヒヨリも使ってくださぁい……♡　オナホのヒヨリに、性処理のお仕事させてくださぁい♡　たまたまの中身を全部、コキ捨ててくださぁい♡」
　言葉にも吐息にも熱がこもりきっていた。オナニーしながら男女の結合部を見上げ、赤い舌を伸ばして滴る淫汁を味わう。卑屈で小心者だったヒヨリが他人のセックスへ割り込んで大胆不敵にペニスをねだる。
「んくぅッ♡　あっ、おひッ♡　んぉぉっ♡　せんせぇ、せんせぇぇッ♡」
「おかしいな。ミサキは犬じゃなかったかな？」
「イヌ、はあんッ！　ミサキッ、先生のッ、かいぬしさまのッ、メス犬ですぅッ♡
あッ！　わふッ♡　わうーッ♡　わおぉぉん♡」
　ミサキはよだれをこぼしながら、尻を揺すった。しがみついたソファをギシギシと

揺すりつつ腰を上下させる。幸福感を顔いっぱいに表して、犬の鳴き真似をしながら黒い首輪をカチャカチャ揺らす。

「はは、ミサキは可愛いね。ほら、もっと鳴いてごらん」

ぱん、ぱん、ぱん、ぱんっ！

「わふぅぅぅっ♡　わんッ、あんッ、あぉんっ♡　わうぅぅ〜っ♡」

先生が腰をスイングし、ミサキの尻肉に打ちつける。丸出しになっている肉の丘を歪め、波をたてる。かつて自殺を試みたこともある少女を喜びの波で溺れさせていく。

「わふッ♡　わぅんッ♡　はうぅぅ〜っ♡」

ミサキの口は開きっぱなしだ。下品に舌を突き出し、よだれを垂れ流している。

その唾液を、首を伸ばしたアツコがちゅるりと吸い取った。

「っ……姫、アツコも、なのか……」

「そうだよサオリちゃん、私もう姫じゃないんだぁ……先生にパコッていただくのが生きがいの、セックス奴隷にしていただけたの♡」

ヒヨリと違って獣の体勢で待っていたアツコだが、落ち着きのない様子で腰をくねらせている。間近でミサキの痴態を見せられてガマンできない、早く先生が欲しくてたまらない――そう考えているらしいことが、なぜかサオリにも分かった。

（なんだ……頭がうずく。初めての感覚だ……まさか、光輪（ヘイロー）か？）

アツコのヘイローがチカチカまたたく。そのリズムに合わせて、彼女の欲望がなぜか伝わってくる。そう言えば、先生に犯され続けるミサキのヘイローも……。

「あッ♡　あっイクっ？　先生イきそぉ？　私の中で射精する？　出して出してっ♡　駄犬の子宮使ってッ♡　早くっ、早く飼い主様のザーメンこき捨ててくださいィッ♡」

……いよいよ、先生が果てようとしているらしい。犬のマネを止めたミサキが射精を乞うて尻をくねらせている。整った顔立ちを汗と涙とよだれでぐちゃぐちゃにしながら、艶めかしく悶絶している。

「最後までッ、全部ッ、この駄犬にっ、んんんッ！　先生のッ、ちんちん咥え、ないと生きてけない、ミサキの犬まんこにっ、くださいッ♡　先生のカッコいいザーメン、ザーメンこき捨てでッ、ミサキをイかせてくださ――」

「よせっ、出すなっ！」

サオリは跳ねるように起き上がり、叫んだ。

先生は機械人や獣人の市民と違い、自分たち生徒とよく似た外見をしている。膣内に射精されたらミサキが妊娠する――不幸になってしまう！

しかし。

「ふっ、ふうぅっ！」
先生はペニスを半ば抜き、ヴァギナの浅いところをかき回した。
「イグッ♡　イッぐッ♡　イっぐぅぅ――ッッ♡♡」
たちまち絶頂するミサキのヘイローが、点いたり消えたりを繰り返す。
その点滅を見て取った先生がペニスを抜き去り、すぐさま横の少女にハメ直した。
白いセパレート水着の清楚な少女、サオリたちの『姫』だったアツコに。
「んっ、ぁはぁッ♡　きたっ♡　おちんぽ様キタッ♡　奴隷まんこにキてくれたぁ♡」
（姫が……あんな声を出して……！）
サオリは愕然とした。清楚だったアツコが後ろから犯され、藤色の髪を振り乱し、白い喉をさらしてよがる姿に圧倒されてしまう。
「私もイク、ッ、セックス奴隷のッ、お仕事できて嬉しいからッ、イ、ッ、ぅぅッ、ぅぁッ！　んッ！　ッ！　ッッ、ッッッ――♡♡♡」
すごい声を出している。最上階のスイートルームでなければ苦情がきそうなほどだ。
そして何故だか、サオリまで息が荒くなってきた。
「はー……はぁー……」
先生が腰でアツコの尻を弾ませるたび、頭がぼーっとしてくる……。

「アツコッ……」

先生がうめく。発作を起こしたかのように腰を震わせる。射精したのだ。

（――!? なんだこれは、何かくる）

先生の絶頂を悟った瞬間、サオリも同期するように腰を震わせた。ホットパンツの下からベトついた液体がにじんで……いや、湧き出ている。太ももへ垂れるほどだ。

アツコが叫ぶ。

「熱ッ、ぁぅッ、ッッッ、なッ、中でッ、ビュクビュクッ、先生、ご主人さまッ、ぁぁッ、ありがとうございますっ、しきゅーにいっぱいッ、お射精ありがとうございます、ありがとう、ございますぅぅッ……♡♡♡」

至福の笑みを浮かべている。十五歳の子宮に精液をコキ捨てられ、体液をぶちまけるゴミ箱のように使われたのに。

異様な雰囲気がスイートルームに漂う。アツコが尻を凹ませて中出しを受け止め、ミサキが絶頂に痙攣し、ヒヨリが指を咥えてペニスを見上げ、さらには――

（くるっ、くる、くるくるッ私もくるぅ――!）

サオリもまた得体の知れない興奮に膝をつき、全身を震わせた。チューブトップの下で乳首が勃起する。ホットパンツの下で陰唇（ラビア）が、陰核（クリトリス）が、そして膣（ヴァギナ）が燃えた。

指一本触られていない。自分で慰めてもいない。ただ先生と仲間たちとの行為を見せられ、先生の絶頂を感じただけで、サオリの意識は真っ白に染まっていた。
「はぁぁッ、ッッ――……♡」
……自分が信じられなかった。仲間たちの性が大人に搾取されるという事態を前に、錠前サオリは憎しみでも嫌悪でもなくエクスタシーを得たのだった。

やがて、先生がアツコから男根を引き抜いた。
「せんせい……はー♡　はーっ♡　やだぁ、先生ぇ、いかないでぇ……あうぅん♡」
アツコの中から現れたソレはピンと反り返り、まだ物足りないと主張している。
不気味に脈打つオスの象徴に、床に降りたミサキが唇を寄せていった。
「先生……んちゅ、ん、ちゅっちゅ……♡　ヤリ捨て、ありがとうございました……私たちみんなの、飼い主さま……♡」
ミサキは射精に至るまでの手段として使われた。十六歳の女性器をエグり回されたあげく、放り捨てられたのだ。しかし彼女は先生を【みんなの飼い主さま】と呼び、感謝を捧げている。
「バカな、こんな……奴隷や犬や道具になるのが、お前たちの幸せ……？」

どうしてだろう。自らを「セックス奴隷」「メス犬」「オナホ」と表現する仲間たちのことが、サオリの目には幸福そうに見えた。

「はー……はー……違うよぉ……はー……♡　私たちの幸せ……♡」

アツコが振り返った。水着は乱れ肌は真っ赤、股間から汁が垂れている。

「もう先生にシてもらったって聞いてたけど……気づいてなかったんだ？　ふうん」

なぜか攻められている気がして、サオリは顔をそむけた。

「サオリちゃん、まだ先生の奴隷になれてなかったの？」

「黙れ……黙れ、奴隷だと？　私たちは自由になったはずだっ」

「うん、先生のおかげでね。でも分かるでしょ、どぉして、こうなったのか」

「分かるものか、分かるはずが……」

ウソだ。

「ふふ、体は正直だね」

「サオリ姉さんのヘイロー、チカってますよ？　ぇろん、んちゅぅ……♡」

「あは、太ももまで濡らしちゃって……ちゅ、ちゅっ……♡」

スイートの窓ガラスに写るサオリ自身の光輪（ヘイロー）がチカチカと点滅している。みんなのヘイローもそうだ。その点滅に合わせて、すてきな電流が身体を駆け巡っている。

先生はヒヨリとミサキの頭を撫でてやっていた。二人にペニスを舐められて気持ちよさそうに……そう認識するとヘイローの電流が強くなり、水着の下がまた濡れる。
アツコが子供をなだめるように語りかけてきた。
「先生に犯されると幸せで、射精してくれるだけでイく。そう感じさせるのが光輪（ヘイロー）の役割。運命の人とする性行為を無限の悦びにしてくれる、私たち生徒だけの宝物」
「うそ、うそだ姫、性行為は奪われることで、怖いことで」
「それは相手が運命の人じゃないから。先生がその人なんだよ」
「獣人に体を売って死んだ子もいたじゃないか……」
「あれは薬を打たれたから。先生はそんなもの使ってないよ」
「でも初めての時は痛くて、胸がバクバクして、頭が真っ白になって」
「はぁ……バージンの時は私もそうだったよ？　でも、今はこう……なれてる」
アツコはふらつきながら立ち上がり、先生に抱きついた。先生はミサキとヒヨリにフェラチオされながらも、アツコをしっかりと支える。
「光輪（ヘイロー）はね、私たち生徒が先生の番（つが）いである証なの。ほら、サオリちゃんも……」
「だとしても奴隷はイヤだ！」
サオリも立ち上がった。腰から下が痺れるが、なんとか腹に力を入れる。

「大人にすがらなければ生きていけないなんて、そんなのは虚しすぎる……私は自分の人生を生きたい。自分一人で生きてみたいんだ。でなければ……じゃないと……」
アツコが薄く笑う。ミサキとヒヨリは口淫を続けながらサオリを見ている。
（ああ、先生――ひどいぞ、お前、お前は私だけ、私だけを置き去りにして――）
口にできない思いが胸をついた時、先生が動いた。フェラチオを止めさせ、サオリに向き直る。アツコたちから離れて、こちらに近づいてきた。
「それがサオリの考えなんだね」
サオリは一歩後ずさる。
「ねえサオリ、一時間だけ一緒にいてくれないかな。私のすることを見てほしい」
「いやだ……怖い……」
「何もしない。大好きなサオリに、ただ私の気持ちを知って欲しいだけなんだ」
思わず先生の顔を見る。初めてを捧げたいと思った人の困り顔。
無意識にペニスを見てしまい、慌てて視線をそらす。
……腹の傷が目に入った。かつて、サオリが撃ち抜いた傷だ。
「いつでも逃げていい。二度と会ってくれなくてもいい。だから、頼むよ」
先生から頭を下げられて、サオリはついに肯いた。

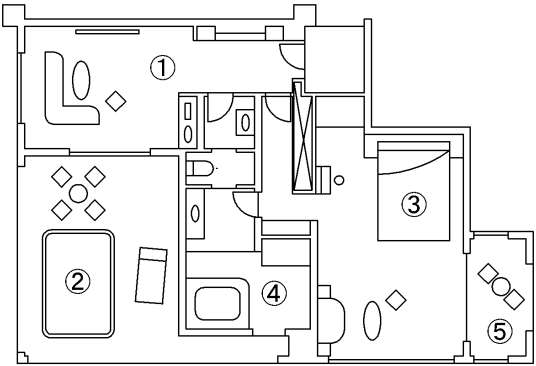
② プライベートプール

（設備）

- 温度調節機能付きプール
- プールサイドチェア ＆ サンシェード
- 浮き輪やフロート類
- プールサイド用バスタオル
- 夜間用ライトアップ照明

（ホテルからのご提案）

再び水着に着替えさせてのプチ撮影会はいかがでしょう。貴紳だけのためにセクシーなアピール合戦をさせてみては？ 大型サイドチェアで全員の肌を火照らせた後は、裸でプールに飛び込むのも一興です。



著者 web ページリンク集

ハーメルン　pixiv

X（旧Twitter）　Skeb

鍵穴は水着の下に

サオリちゃん、まだ先生の奴隷になれてなかったの？

奥付

発行　a-su の筆
著者　a-su
発行日　令和7年4月5日　初版
於サンライズクリエイション京都
ブルーマーケット17
印刷　ちょ古っ都製本工房

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

この本の作成には文庫本作成ツール「威沙」を使用しています。(http://tokimi.sylphid.jp/)

件名：親愛なるシャーレの「先生」へ

アウトロー・リゾートを管理する AI より、シャーレの先生に返信を差し上げます。「J・S の心を塗り替える特別な夜を過ごしたい」とのご要望にお応えすべく、特別プランをご提案申し上げます。

J・S 様、H・A 様、T・H 様、I・M 様はあのアリウス分校ご出身と伺いましたので、《自由と贅沢》をコンセプトに貧民街の記憶を上書きする感動的な一夜をプランニングいたしました。

アウトロービーチを見下ろす当ホテル最上階のスイートルーム（180 ㎡）にはオーシャンビュー独占のプライベートプール-②と、5 名様で同時にご利用いただける広々バスルーム-④を備えます。さらにシャンデリア輝くリビング-①には皆様でおくつろぎいただける大型ソファ、ベッドルーム-③には上質なキングサイズベッドを特別にご用意いたします。（添付の図 1 をご参照願います）

ご予約から実施まで、専属コンシェルジュが全てサポートいたします。連邦捜査部 S.C.H.A.L.E の権力に相応しい至福の夜を、ウブな生徒様の心へ刻み込んでみませんか？

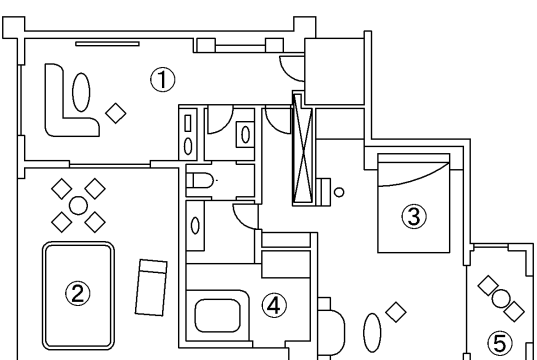


図 1 最上階 グラン・スイートルーム見取り図